



カメラマン物語

第3話

竜次アシスタントになる

竜次 アシスタントになる

集合写真を撮影して、美穂ちゃんからボロクソにいわれ落ち込んだ時、日景に慰めて貰おうと思った。

そうしたら、なんか逆に説教された。

竜次は、自分の未熟さは分っている。

しかし、一生懸命?やったと思っている。

一生懸命は疑問だが、良かれと思って行動した。

確かに、美穂ちゃんに良く思われたいという下心だったが・・・。

竜次自体、自分の正当性を確証できないのだが、
結局、善意で行動したのに、へたくそなのしられた。
それが、もの凄く傷ついた理由だ。

高校生の時代は、「一生懸命」ってさえいえば
ののしりから、逃げられたのに・・・

世の中が悪い・・・

俺は、悪くない。

写真の知識が未熟なのを知った上、頼まれた
自分から、撮影しようと言ったわけではない

なのに

なのに

結局、ふてくされた竜次は、新宿に行った。
特別行く当てがあるわけではないが、人混みの中を歩きたかった。
「雑踏の中の孤独」が竜次のお気に入りだ。
駅を出て歌舞伎町に歩いて行った。

新宿は、雑多な街だ。
特別好きな町ではない。
雑然としすぎている。
そして危険な匂いや、エロティックな空気を持っている。

自分がカメラを持っているせいか、カメラを持っている人が多いのに気がついた。

街を撮っているやつ。
人を撮っているやつ。
みんな思い思い、ファインダーを覗いている。

「俺もなんか撮ろうかな」
そう思いながら、歩く。
しかし、特別撮りたいものは見当たらなかった。
「俺は何を撮りたいんだろう」
自問自答を繰り返しているだけだった。

ぼーっと歩いているうちに、ラブホテル街に迷い込んだようだ。
妙に人が少ない。
ケバケバしい看板が目につく。
カメラを構えた。
何枚か撮った。

ファインダーの中に、一人の男がいた。
こちらをむいた。
目が合う。
やばそうな男だった。
細いサングラス、第二ボタンを外した黒い絹のシャツ
羽織っているロングコート
明らかにヤバイ人だ。

くわえタバコでこちらに向かってくる。
「まずい。何かやばいものを撮ったか」
臆病者の竜次は血相を変えた。

竜次の本能が竜次に命じる。
「ダッシュしろ」
竜次はカメラを手に持ち、ドタバタと駆け出した。
それに気づいた「やばい男」も走り出す。
「まずい」
目についた脇道に逃げ込む。
必死だ。ゴミ箱を蹴飛ばし、野良猫を飛び越し。

何処をどう走ったか覚えていない。

五分くらい走ってしゃがむ。
訳もなく震えている。
昔から、不良に目を付けられやすく
意味もなく脅かされていた時代が甦る。

キョロキョロと周りを見渡す。
向こうに黒い影が見えた。
竜次は頭に血が上る。

脇にあった黒いドアを見つけて飛びついた。
思い切ってノブを回すと、カチャリとあいた。
竜次は飛び込む。
真っ暗なカーテンがかかっている。その奥に転がり込む。
真っ暗で誰もいない。
竜次はやっと一息をついた。
汗びっしょりだ。
「フー。やばかった」
大きく深呼吸

「あんた！ 誰」
いきなり声がする。
竜次は息が止まる。
奥から人の気配だ。
ゆらりと動いた。
いきなり電気がついた。

女性だ。ピンクのネグリジェをまとっている。
「あんた、お客さんかい？ 予約はなかったけど」
竜次は何かしゃべろうとしたが、アワアワと声に出るのが精一杯だ。
「お客さんでしょ。料金は一万円ばい」
竜次はやっと質問が出た。
「ここ、ここ、ここは何屋さんですか」
竜次は興奮のあまり吃っている。
「ヌードスタジオよ。看板に書いてあるやろ」
女の人の声だ。
標準語ではない。九州人だろうか。
「ヌードスタジオ？」

「1万円？」

竜次は混乱した。

慌てて飛び込んだところがヌードスタジオだったのだ。

ヌードスタジオが有ると言うことは、友達から聞いて知っていた。

写真をちゃんと撮るのではなく、H目的の風俗店なのだ。

「時間は30分。カメラは持っとっ？ 無ければポラロイドをレンタルする？。フィルム10枚付きで3000円」

何処の出身か分からない不思議な話し方だ。

「カメラは持ってます」

竜次の声が震えている。

声の持ち主は、撮影用のバック紙の前の照明をつけた。

照明といっても、蛍光灯だ。

初めて女性の全身が見えた。

「美魔女だ」

髪が長い。

ネグリジェを着ているがプロポーションの良さはわかる。

いつの間にかお客になっていた。

変なことを言って追い出されて、表にいるかも知れないヤバイおにいさんに捕まるかも知れない。

そう考えると、ここにいた方がましだと思われた。

幸いポケットには、教科書代として母さんから貰った1万円があった。

美魔女が竜次を見た。

「あら、若いお客さんばい。学生さんかい？」

「は、はい」

「そんならば、頑張って脱ぐよ」

竜次は慌てた。

「チョット待って下さい。まだ脱がなくていいです」

「あら、そう」

黒いバック紙の前に、二人用の黒いソファーがおいてあり、そこにピンクのネグリジェ姿で女性はすわった。

ここは、空気を読んでお客になるべきだと決めた。

怖いけど、女性のヌードにも大いに興味がある。

竜次は撮ることに決めた。

竜次はカメラのスイッチを入れる。

もう一度女性を見た。

よく見ると若くはないが、目が大きく愛嬌のある顔立ちだ。

好みだ。

「準備が出来とっと？」

女性はニコッと笑って立ち上がった。

「音楽ば、かけるよ」

そう言って、脇に置いてあるCDラジカセのスイッチを入れる。

ムード音楽のシンボリック的存在メリージェーンだ。

いきなり、照明がスポットになった。

女の人は音楽にあわせてゆらゆらと踊り出す。

「わたしの名前は一条ユカリよ。時間までゆっくり撮らんばよ。ポーズの注文はだいたい聞くけど、触ったらいかんよ」

「はい」

竜次は素直だ。

一条ユカリの踊りは艶めかしかった。

竜次は、完全に上がっていた。

竜次は童貞ではない。

童貞消失は、高校3年の時、同級生の女の子に誘われてラブホテルに入ったのだが、ベッドに入って誘われるままに挿入。

1分も持たなかった。3度挑んだが、3回とも1分いないという結果に終わった。

同級生の女の子は「恐ろしく早いわね」とつぶやいて、それから二度と誘われなかった。

そんな敏感な竜次だ。

艶かしい大人の女性の前で平静を保っていられるわけがない。

ネグリジェは透けているので、黒いブラとパンティーははっきりわかる。

竜次はゴクリと生唾を呑む。

息子はいきなり勃起して、制御不能状態。

異様な興奮の中でカメラをかまえる。

おや？

ファインダーを覗くと違う世界が見える。

不思議だが、客観的に見えている。

「学生さん。ちゃんと撮らんばよ」

そう言うと、ギョッと胸を突き出す。

カシャ、カシャ、カシャとシャッターを押す。

「凄い」

思わず声が出る。

ポーズを変えるたびにシャッターを押す。

無我夢中だ。

サユリはそんな竜次を楽しむ様に、肢体をくねらす。

ブラを取る。

Dカップの乳房があらわになる。

竜次の興奮は最高潮だ。

とりつかれた様にシャッターを押す。

突然サユリは踊りを止めた。

カメラを構えた竜次の鼻から、鼻血がポタポタ落ちている。

「あんた、鼻血がすごい出てるわよ」

「えっ」

その声に、我に返った。

シャツまで血まみれだ。

「ひゃ-あんた、女の裸見たこと無いんでしょ」

「いえ、有ります、有ります。雑誌でもネットでもいっぱい見えています」

「以外とスケベなんだね。でも生は違うでしょ」

「はい」

「あれまー、そんなにズボンをふくらまして」

そういうと、竜次のそばに近づいて来て、

勃起して TENT を張っているズボンをギュッと握った。

「あー、うー」

竜次は腰砕けになった。

射精してしまったのだ。

「あれ、出しちゃったの」

サユリは呆れた。

「すみません」

竜次は情けない声を出した。

サユリは横のソファーにどかりと座って、タバコに火を付ける。

「あんた、カメラマンに向いとらんばい」

鼻から煙りをだす。

「はあ」

竜次は、ただ頷くだけだ。

「あたい、前に写真のモデルやってたんだ。有名な篠川紀信さんから撮って貰ったこともあるとよ」

サユリは昔の話しをし出した。

「もう、だいぶ昔の話しだけどさ。激写なんて言葉が流行った時代よ。激写って知ってる？」

竜次はパンツの中も、自分の精液で気持ち悪い。

ここから逃げだしたい。しかし表に出るとヤバイお兄さんがいるかも知れない。

しかし、暴力より、気持ち悪い方がいい。

竜次は大人しく話しを聞くことにした。

「聞いたことは有ります」

「そう。あの時代、原宿、渋谷にはカメラマンアシスタントが沢山いたんよ。

石を投げればカメラマンに当たると言われていたわ。

あたいも、若かったから、グラビアの仕事は結構あったの。

モデルって金も貰えるし、周りからチャホヤされるの。

そうなる夜遊びもするしお酒も飲む。面白かったよ。

バッテン、2年から3年もすると、肌も荒れるし、スタイルも崩れる。

その内、若い子が登場するといきなりランクが下がるとよ。

雑誌のグラビアから声がかからなくなると、寂しかよ。

そうなっても、篠川さんに撮ってもらったというプライドは、消えんとよ。

プライドが邪魔するってことね。当然まわりのスタッフの評判も悪くなったと。

そがんこともわからなかった。若かったから。

バッテン、時間は確実に過ぎていき、30才過ぎてから初めてきずいたと。

もっと自分を管理すれば良かったとね。

私と同じ年の子でも、生き残っているのは、お酒も飲まないし、節制している子たちだったわ。

あたいの自業自得なんだわ。

そうしている内に、裸の仕事が来るの。それでおしまい」

竜次は聞きいってしまっていた。

自虐的だが、初めて聞く世界の話だ。妙に納得がいく。

「モデルの仕事は大変なんですね」

「そうよ。写真撮影はもう良いの？ あと10分ほどあるけど」

「もういいです」

鼻血も収まった。シャツの血とパンツのガバガバはしょうがない。

カバンで隠せばいい。

竜次は帰り支度を始めた。

その時、入り口が勢いよく、扉がわりの黒いカーテンがバサリと開いた。

「おい」

男の声だ。

竜次はとっさに「ヤバイ人」が乗り込んだと、隅っこに隠れようとした。

「サユリ、帰ったぞ」

「あんた」

サユリは、大声をだす。

「3年間何処に行っと思ったん？」

「その話しは後だ。腹減った。なんか食わせろ。おや？この男は誰だ」

「お客さんよ」

「お客。まだヌードスタジオやっているんだな。もうすぐ40歳なんだろう。お前の裸なんかまだ見たい奴がいるのか」

「何言ってるのよ。失礼ね。まだDカップよ。この学生さんだって、鼻血は出すし、チョット触っただけで射精しちゃって、ズボンの中はガビガビよ」

竜次は顔が真っ赤になった。

「ほー、触った」

男はこわい声をだした。

「バカねー。ズボンの上からよ。あんたやいてんの」

サユリは機嫌がよくなった。

「まーいい」

男は、荷物をどかりと床に置いた。

竜次はその荷物がカメラバックと気づいた。

その目線に男は気づいた。

「これが、分かるのか」

「カメラバックですね」

男は、バックを開けた。

中には、一眼レフがズッシリと入っている。

キャノンのイオス1のボディが2台。

太いレンズが3本ストロボ1つ。

肩にくい込む重さだ。竜次は男を見上げた。

「カメラマンなんですか」

男は竜次を見て、ニヤリとした。

男の名前は荒木又二郎というらしい。

50歳位か。

ヌードスタジオの経営者兼モデルの一条サユリの愛人らしい。

3年前にいなくなったらしい。

結局、スタジオの奥の部屋で、3人、出前の寿司とカツ丼を食べる事になった。

「竜次と言ったな。事情はわかった。本当にカメラマンになりたいのか」

「はあ、出来れば」

カツ丼を食いながらの生返事だ。

「よし。俺のアシスタントにしてやる」

「えー」

「あんた、適当な事を言っちゃダメばい」

「何が適当だ。俺が、超一流のカメラマンだと言うことは、お前が一番知ってるじゃないか」

「昔はね」

サユリは竜次に向かってはなす。

「白桜堂って、知ってる？」

白桜堂は日本で一番大きな広告代理店だ。

「若い時、又二郎はそのカメラマンだったの」

「凄いですね」

写真に疎い竜次でも、そのレベルの高さはなんとなく分かる。

「イジメ撲滅キャンペーンの子供達の写真で、土建門賞というのをもらったこともあったわよね」

土建門といえば、日本の写真家のカリスマだ。

「そしてフリーになったの。それからは、いろんな写真の場ですごく活躍していたの」

又二郎は、知らん顔してビールを飲んでいる。

「私はそんな時、グラビアのモデルとして又二郎にあったの。着物メーカーがスポンサーで、着物姿を撮影する約束だったの。又二郎は颯爽と現場に現れたわ。

あの頃は野心が顔に現れていた。

私を見るなりいきなりシャッターを押し始めたの。

何枚か撮った後、私に言ったの。脱げと」

「いきなりですか」

「メイクさんもヘアーの人も、代理店の人もいたの。脱ぐなんて約束じゃなかったのに」

「私がびっくりしていると、いきなり手を掴んで引っ張て行かれたの。日本庭園のど真ん中で、いきなり帯をほどかれ、クルクルと回された」

「お代官様パターンですね」

「そうよ、抵抗する間もなかった。あっという間に長襦袢一枚にさせられて、芝生の上に転がされたの。そんな私を又二郎は、シャッターを押し続けた」

「よくそんな事が許されましたね」

「それから30分ほどいろんなポーズをとらされ、写真を撮られたわ」

「まわりは止めなかったのですか」

「止めたけど、又二郎はゆう事を聞かんとよ。撮り終わったと思ったら、さっさと帰って行ったと」

「ひどい話ですね、仕事は大丈夫だったんですか」

「とんでもない。代理店もスポンサーもカンカンで、契約違反で又二郎を訴えたの」
竜次は、そんな武勇伝をもっているなんて見えないこの中年の男をまじまじと見た。

又二郎は飯を食い終わって、楊枝で歯をせせっている。

「昔の話だ。もう忘れた」

愛想のかけらもない。

「おい、若いの。名前は何と言うのだ」

「はい、竜次といいます」

「威勢の良い名だ。カメラマン志望と言ったな。明日からアシスタントにしてやる」

「いやや、そう簡単に決められないと、思いますが」

「何か都合が悪いのか。暇なんだろう」

「まあ、暇ですけど。あっ、僕は学生なので学校が」

「バカ言え。ちゃんとした学生なら、こんな昼間にヌードスタジオに来て、鼻血出して、射精までしない。どうせ馬鹿学生に決まってる」

「馬鹿学生じゃないですよ。カメラマンになる修行中なんです」

「カメラマンになりたいんだろ。だったら良いんじゃないかい」

「はははー はい」

という訳で俺はアシスタントになった。

翌日、竜次は手ぶらでヌードスタジオにやって来た。

「サー行くぞ」

又二郎は元気が良い。

「はい、先生。今日の撮影はなんですか」

「週間アダルトの袋とじエロ写真だ。エロ学生の初アシストにはピッタリだろう」

「エロ学生じゃ有りませんか。しかし面白そうですね」

「そうだ。写真は面白いんだ」

竜次はその言葉が胸に染みるようだった。

「そうですね。写真は面白いですよ」

新宿のラブホテル街を、颯爽と歩く中年カメラマンと、

カメラバックを二つ、大きい三脚を背中にしょって、ふらふら歩く竜次の姿があった。